

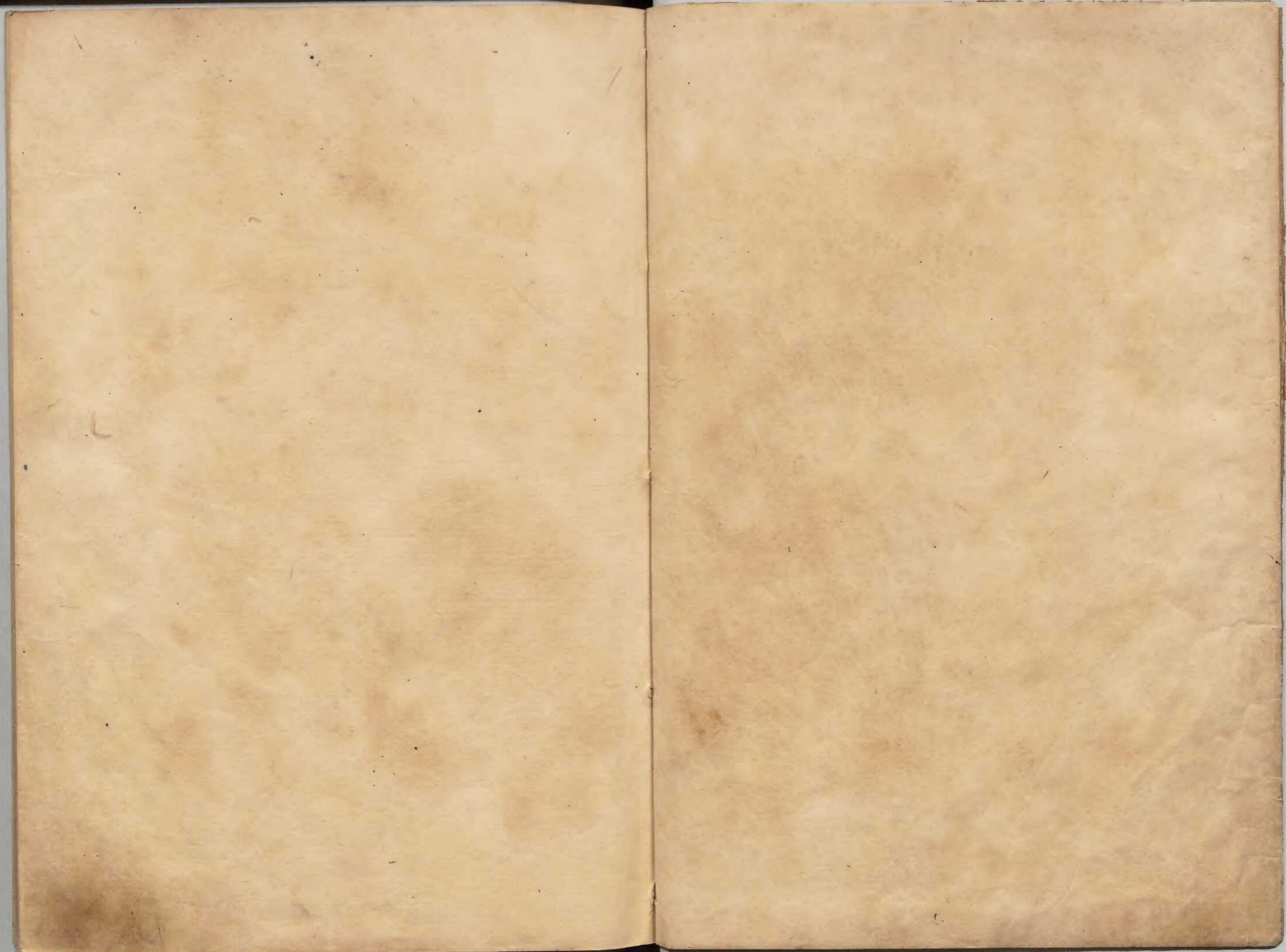
寛永諸家譜

清和源氏
三冊之内
頼清流

30

内閣文庫		
番號	和	20199
冊數	186(34)
函號	特	76
		1





安藤
村上

寛永諸家系圖傳

清和源氏

己一

頼清流

安藤

頼信二男

頼清

肥後守

従四位下

家系

長治寺

従五位下

淺草文庫

家基いえもと

三郎重さんらうしげ

長基ながもと

安友やすとも三郎さんらう

成基なりもと

高たか金院かねいん苑えん人ひと

基重もとしげ

兵庫頭へいこづかみ

素基もと

判友代はんともしろ

ける八九代中ちゆう後ご

家重いえしげ

安友やすとも三郎さんらう重しげ門かど

生なま園のり冬ふゆ河がわ

廣忠卿

東照大権現小治久年

基能

重助

生國日あ

大権現小つふなりて涉旗なりとす

元龜三年十二月を別三方原合戦の

時討記

来

弥善清

生國日あ

利發一て道表と号す

大権現小治久年

家定

傳重

生國日あ

大権現小つふなりとす

定正

九右衛門尉

生國日あ

天正十一年 後別今川氏末小属と

永禄十一年 武田信玄共と戦て

後河小世あ入氏末殿を以て後府と

をくを別魚川此城小入け時士卒

あぶふをれよくなり定正お志

ぶ氏末定正が忠志と賞一感状と

わふ

日十二年 氏末頼魚川の城より在

て天王山あく合戦の時定正軍功

あり氏末感状とさづく一も後氏末

魚川此城とせく相別小田原より

たもじく士卒おりく分敷一と

お志ぶふのまがり十人定正を

中ふり

氏真入海の時家信ふり此事と志

さ致ゆにお志がぶりのあ一定正

も又園末小志く小原常隆分

康成子属一たびく戦口と

くらげす其後老母ふまゑんた
 め中固よゆんとする時康成書
 と道くくびくれ戦口と感で
 定正とゆゑんしすあれども老
 母れ事とありふあつてりる事あ
 たしめて三別よゆと
 大権現とゆゑを家治とゆゑ鳥
 居表大徳所耐能と居す
 天正十八年岡東沙進教忠付此

城とせりゆ時定正うれ兵に
 くりつて先陣よまきみ敵の首と
 切く城の壁れ下みくつめに戦
 十年四十三 法名宗傳

定智

傳十郎 甲別部留郡に生る

安長十四年

名徳院殿と相一なりて中書院

卷とつ水心

日十九年れ冬大坂陣小治野
元和元年大坂再乱の時山治老首
吉組小引寸敵兵平野口小治野
等と定智敵陣よりせ入る甲
士一人歩卒一人と討ち家その四
と涉威あつて米比八百石とたふ
日九年 治は依りて涉野の頭也
なり

寛永元年は抄弓の足輕五十八
とあつり食禄二百石とくしたふ
日九年馬上十人とくしあつけらる
日十年米比七百石れは加増と成す
日十二年九月二日死す五十一歳
は名宗休

定勝

九十九

武別

寛永四年十五歳少く

將軍家と御しなむ

日十年よりつゝたてまつる

定次

徳右衛門村 生國日あ

寛永八年十二歳少く

將軍家と御しなむ

日十二年よりつゝたてまつる

家次

令助 右衛門尉 生國三河

大権現まつゝなむ

を別三方系は陣小はす

冬列長篠は陣小志くかひなむ

生挿とけら

長久もは合戦の時首一級うちとる

文禄元年病死六十二歳

次書

弘長清 生國三別

天正十八年

大権現小つ之守家之れより後

白蓮院殿

將軍家小つ之守家

次書

弘長清

寛永九年

將軍家小つ之守家

日十二年 沙書院番小入

定次

次書 生國旧あ

大権現小つ之守家 沙書院番小入

三郎信康主小つ之守家 信康主小入

て後石川伯耆守教正組小入

大権現関東沙入國の時日教沙入番

組小引一 戦場小引と事十

六度

安長五年定次は見の加とあり
教内城外へ出く敵とうち或は
ちて軍切らふは、おほ小引
一日すて小引加ふは、おほ定次より
いふは、お小引知ておなくれ敵兵と
村よりしむ時、お定次賊流の矢小
あつたの股と村わらふ事あり

之矢と抜く七年と指揮してつね
戦死す年六十一は、時日組小引討死
は、おりの松井茂吉、お若川を兼門
原田三九郎、糟谷作十郎、日十三郎
大黒孫次郎、佐海兵衛、河村合助、後
加兵衛、福尾三郎、中嶋三郎、お若川、お若川
あり、このほ、定次が一族より、組中の兵
戦死するも、これにほ

正次

若く助 与十郎 次在馬村 生國三河

大権現

台酒院殿ふつふを

正次十二歳若く助に号する時治父傳是
人といふての道さんいせと衆
人急ふといふ事な人急ふ新居す遊
者うの事れ口へいんこす正次

かろ事く遊もの切くれと討
ちすとして時刻と移すのあひご

大権現の上やふ事して傳是馬が一命
とゆふはれ

或時暴烈れもの人急ふ新居と衆
人急ふといふ事な人急ふ新居と衆
時正次作徳と物くうかひいふ事新居
れもの刀と扱くお侍正次垣と伝は
是といふ事と信康といふ事と伝は

ひくもあされてはふ

天正八年後別當目小く合戦の時
敵兵朝比奈波河忠が家信矢部孫三
郎先魁と成り上率と下知と正次
孫三郎とお戦て其首とまきふけ日
巻の言名なりけ事

大権現の上中に在りてと出はまき
つふ身ふふと上沙麩英少とて永
樂讀二十貫文とたふし時小正次十

六葉

を別場的場捕り合戦の時軍切あり
を別橋花谷小あわく正次を田舎
こやもに酒井と四郎が陣屋とせむ
時敵あましお張して守番の足輕と
返らす若菜ととんく正次より
けぐ家小あわくあ人小若菜と
新く敵三三人とつきしあ足輕より
それ首とゆきし敵兵と追

あつらうけく其陣えん所よとなれぶぐ
にうらうく足輕あし小こす石川いしかわ治ち者者也
是こゝと聞きく比ひの組ぐみ小こをせじつてみまり
小こ敵てきとお敵あいつふ足あし軍ぐん法はつとうじくならむ
て二人ふたりの者ものと筑つ居ぐせしじつ事こと二に日にち
と料りょうゆうて柵さくのくおお二に十じゅうとおさ
しし
尾お別べつ里り崎さきの城しろへ兵へい糧りやう運うん送そうのものを討う
とるとべきのことをいふ 約やく令れいとかけけられ此こゝ

地ち小こおおりりじじひひくく兵へいとおももせせとし時ときはは昔むかし
坡のり足あし丈ぢょうれれのらとと切き合あくく病やまとかけけられ
とと引ひ返かへくく正ただ次つぎ坡のり者もののらととううら
ゆゆ
日ひ國くに蟹かにのら合あ戦せんのら時ときはは父ちち子こ戦せん切きり
是こゝより五年ごねん國くに原はら津つ陣ぢんのら時とき
大おほ指さし現げんれれ使つかゆゆててはは戸とありり尾お別べつ
清せい次つぎ小こおおりりじじひひくく軍ぐんのら神かみとえ坂さか
比ひ小こくく故こ年ねん落らく城じやうのらとと聞きく

一言と一けしき

大権現殿の戸骸いぶりぐくふじふややこハ

せたまふ正次あるく大垣たかれ方かたひふ

ゆとす

大権現おんのまききううやて敵兵てきへい殿どのを

とらせたまふ又

名酒院殿なへのためまはいしき途

申まくちのねしきとなす

旧七年きゅう正月しちご女に六む日に湯ゆ使して越前えちぜん小

おまじく

旧年きゅう十一月じゅう女に六む日にと使て賀列がれつ

令しん次じふしり翌年えいねん正月しちご女に六む日にはな

ゆり

旧八年きゅう九月くわ女に三さん日に檢けん使しと所々ところ伏ふ見みな

いしにん

旧九年きゅう六月りく女に三さん日に檢けん使して考列こうれつ

水戸みづふしりの事こと

將軍しやう家け清きよ造ぞう生なまの時とき七月しちがつ

名徳院殿の御使ごしより伏見ふしより
大権現おんけんへ云い上かす

日十年七月七日御使ごしより伏見ふし
より

日十一年ふ常えん講ぶ奉ぶりごなる

日年九月御使ごしより後あ府ふより

日十二年六月廿二日割わ法ぽうの御使ごしより

伊賀い賀がよりおむむく

日十二年七月六日丹波たん國くに條じょうの地ち常ふ

講こうの時とき御使ごしとなる

日十四年二月

名徳院殿なとくゐん後ご府ふよりおむむくたまふ時とき常ふ

とつむむ

日年二月六日後ご府ふより越こ後ごよりおむむ

まゝく割わ法ぽうの御使ごしとなる

日十五年三月二日御使ごしより伏見ふし

より

日十六年ふ常えん講ぶ奉ぶりごなる

日十七年二月廿八日拾使して伏見
ふりしる

日十九年ハ常陸なりとつて

同年相別小田原の城外部破却の時

なりやなるか

同年大坂兵乱の時正次は陣下り

ちとく日夜先陣の拾使して大坂小

ありと枚原勝時小陣とる時小

正次は代越中守伊东右馬允と直に

鳴野小おむしひくなりとる日十日

廿三日敵兵鳴野小お張一柵をかま

鑛炮とけく並居り右馬允と

とひらちえんとりひけと正次がいく

これ進ちえん事いとやと一然

ゆもけ所の地取あつてたひ

柵とやぬふといふやもてに人数た

てゆふとあつて右馬允かやれ

敵となひらちえんとる時

ふあらずとふ正次がいそく 台籠り
達一ては誥れ坊とつらんふはあが
としひはば大馬元これよほどまは
釣今小依く柳原をいさなるあま
堀尾山崎守上松原勝と作新義宣が
あ陣の後誥としてせまふ正次
ふ道ふ志くふく廿四日の晨先鋒と
あく柵と備く鑑とあし又柵を
越く兵士一人と切ふてれと堀

の中にふこをれ柵と越く士率り
今トてせあ入志し正次が席は沼井
た一席柵と備く敵一人とつきぬと
伊東あるえが郎從あ長あをせ
あく敵の鑑とうもいさる尾代
越中守がら力無敵た内をせりて
た一席がつきぬとすの首とさん
すた一席がいそく是我つきぬと
あたらはこれとす事なれ

つづく正次が前りよきふも後
越中もが長子基三郎耳くも首
と少家た一郎三ヶ所此陣所
ゆれ正次もせゆく柵破る法
小岳くいく敵兵も法す
味方陣とわくころもる所
に敵兵ゆたびすみおく志
小銃炮とくつ京勝が士卒死
さずげくものおほくして利と失ん

こせぬ堀尾山崎が士卒とつり
てゆせぐい味方つる小事ぬなく
陣所とりら可し

日十二月下旬大坂和睦の時正次治と
ゆめらして大坂石垣破却のなりと
ちるは陣のほら夜の軍由は
地もるるとたまふ

大指現三列を良しく湯島橋の上記
正次

仁徳院殿の御成りして奈良小玉を
元和元年大坂再亂の時 名譽小
玉とて急り後別法水より伏見
小堀くは旗をりやありたゞく
先陣の檢使とつけたまひる五月廿
合戦此時松平筑前守本多忠房後守
がうると敵陣ちりくすまきのひり
治とつけまひる是とほく時り
天王寺なび小玉送り敵兵六七

十勝とみまふ正次と道と見く討
死むきのり下知とやいんやも兵糧
物とつらば子也士卒すみゆと
正次一力もせめつとたのむ敵と
相殺く首級とゆら然やもゆら
すんで敵とやゆら家 湯前小玉
あく湯前とやあびる道より平助
ふいふと使とびくまくと敵と
ゆら 約今の旨とついで醫者

正勝

び小親頼とつけく甚深せむべし
とふ然れども其命をくくして日十
九日ほふ死す年五十一

松原尉 生國三河

伊達正家少つてく鑛炮頭となる

元和元年大坂陣の時首級と成

り

一勝

松原尉

大権現少つてなる

安長二年伏見のく大谷刑部が

席中言楊令七席二園陣の時

一勝令七席とすくんがため大谷

即從とすは是より依くは旗本と

たらきて前田筑前守利常より

はく鑛炮頭となる

元和元年大坂の陣五月七日敵兵
一人半と下知して居けりとい
く味方の勢みかひまじとうたんとす
一勝すみおしく鐘とありせ故敵と
討死す河内鐘匠二ヶ所とかうゆゑ
寛永十七年病死年六十二

定次

三摩子 生國日記

河内馬助政長が家老と成り父と

跡としぐぬ父と諱と甲てたびく

大権現とゆへをふけ例小依く

白虎院殿

將軍の御小湯一を致

寛永十年たる助死を長子帯刀

忠貞定次が御前へ御湯より事を

そりんとす乞小依く帯刀が御城

立しる

正珠

次大馬

生國武苑

元和元年

台徳院殿と押しなりて家督とほ

ぐ時十二歳

同五年涉小姓組となる

寛永三年二條北城(沙幸)

將軍家仕ひしころして 湯森門の時

正珠 此帯刀とぬく侍なり

同七年六月廿九日安率の頭となる

同十年十二月廿八日 治小治と帯衣

と急す

同九年

將軍家小つてたぐまの事

同十年四月十六日涉鐘をりし

なり

同十一年 此地を百石とく久たす

正頼

同十七年十一月四日 津前へあられて
湯島に鴨と持込と

五十郎

元和九年

將軍家より侍人となりて湯島姓組となり

寛永九年湯書院番となり

同十九年十月十六日

竹代君より侍人となりて湯島守となり

正程

翌年春

竹代君より侍人となりて湯島守となり

珠辰

龜子代丸

七十郎

直次

長田郎

長兵衛

長子代下

常刀 生國冬河

知少

大権現小治久

元龜元年六月廿八日江別婦川合
戦の時並次十七歳一を陣小おとしき
軍のろまんとまうらるる時ふあひこ
後井が兵敷十騎山とあり事りて
信長此旗本とや知れんとす並次
ろの氣概とさやつら久保おぼ

等と見みやふとせと是と討く首
敷級とゆく後井が坊と屋がう戦と
接するに及く又首一級とけきり
天正二年五月を別大岳山家輝記
の汽騰坂より出張と

大権現すみやよは是とやあはく
たじろとありたまふ時水小くは
て味方の兵糧とえぬ並次等がけみ
りふ此兵糧と

大権現小敵トてとのまがに暖ふみくど
日二年五月長瀬合戦此時軍中あり
旧年を別言の城合戦の時並次
治とうけたまうし今と軍中にお
こたひてはぬ小甲首一級をゆり島
居長瀬の合戦とらんく並次が勇切と
大権現トてます

旧四年を別大船の戦小並次戦と
うけたまうし軍中に使しあり

居長瀬の旗下足持の組足安右九左衛門
定正力戦して兵刃すてりま
らん及く敵兵二方あり相合くま
定正の進とさうくゆきまがく見え
時並次の進とらんく定正が足持五人小
下知して鉄炮とさうし一めつお一方
此敵とうちやがふ

日十二年四月九日九日尾別長久合
戦の時

大指現先陣の詰掛小 敵七戦と掛
せむ敵のわらび小 兵士等皆敵を
す味方れ詰敵の驍龍小 意なく跡と
い二とびたふ小 及く池田勝入日勝九郎
森武義守 堀久太郎等半途も
らつて取へ

大指現の涉旗下に身くいとみたふ 並
次味方の士卒に鉄炮とけりこえ
ゆす時小 命あつてけりてい

いぎ鉄炮とけりこえ びへりれ
ろが 貴旨うおるふ されら
鉄炮とけりこえ 味方の雄兵すんで
敵のつりく出るものとうらな
並次等詰掛小 すぐれて敵比ふもせ
入時小 鉄炮小 あり 敵あり はよ本陣
武義守
りらよと 並次小 道とてうんとあけま
攻むく小 敵とけりあるもと味方の
兵こりりあるふ一切と其のい

ゆづりてとらんごく常より敵と遊ち
と時小黒母衣うけし敵兵數十騎
あり一兩ふあつまる直次はふしを
じふ敵兵これ勇氣とんく兵と
くま井伊兵部が獨敵兵とおくじ
直次これとすくんとあける直次
が捕らぞ小敵とやりひく直次
兵部が捕らしひけはふし法軍
とし知する人あそとじふとまりおく

ふと時ふふとひひとす直一らん
あわくたのもつとと専とせんや今らん
おひととおとらん兵部が物と
聞くとふみやふゆりて軍路とそふ
時は勝入我部と勝九郎父が死す
事とゆくとふしとせある直次
能はつと勝九郎とつきし又敵
兵一人とつきと共くとこれと
け時直次が能はるおそれと

即ち此人乃鐘ふくく又教の首一級
と得らるなり故前より教と云ふん
はるごうけいも並次が初とたえん
也いばあす唯 君の難をば
んと欲する故兵と同一く軍と
令して燃ふおんで小幡山小嶋り
大権現小福とる此所為あくも武
事小老ころをれは二回だけ時ふあ
けく強の饑と日守までふるごう

軍事小あり

大権現のく並次が勇四と賞し
のさしむるを一日乃曰小教の將二
人とりみまれりさしす所なり
をばれらるを習の信となつてな
上野分正純成瀬年人正正成と同一
く國政とあつりさく時ふ並次武別
を別に別して来比とたまらふ
力足強とつけらる

享長十五年

大権現大納言頼宣卿と後列を列し
封し又東三河少く膏腴の地とえ
らびくろくにたふす時ふ

大権現重次とひく頼宣卿の好見こ
たふふ志も道も重次なり天に政勢
ふあつり心外の事にあつて忠志と
ほくさずといふなり是より先を
別撰頒賀れ地自大次かえお羽守

病ふかつて死と今年一時的亂國
子代今ハ松平式部一志とつて頼宣卿
の旗下に属す國子代知少なる也

大権現の氣ふ依く重次撰頒賀の法
士と下知と元和二年ふと國交代
叔父のきととらけと骸林ふらふ
撰次賀れ諸士なり紙頼宣卿の旗
小属して重次と下知ともらふ

同十九年撰別大坂小事ありて

大権現涉教向の時並次頼宣卿小志

がひくさきふおとびく並次軍事に

鍛錬とらんあ時

大権現小湯して計策の事と申す

時小

大権現頃者小志とらんたまひく又榮

細山小らつてせたまふ並次 命とけ

たまつて陣成れ事とゆはと後

はあふ和賸こなりてゆる翌年又月

大坂再乱の時並次又軍事とそまふ

損頃此士卒に勇兵おり坂等

と並次が勢ふりつて頼宣卿の先け

とす同日七日合戦此時並次

大権現の命とらげて陣中に奔走

て流ゆとらげます又備のかさ

はあもれあさば士卒と下知して

あさごうとらしてろれ甲兵とけ

あつあふ井掃部頭が旗下にお

也也小いさみそんぞ教兵と遊らす
は時重次が子重能即時小討死と即
等事と死れ死する事とつぐ重次が
いよく男児難ふおとじまよく邊野に
死せん事と要と今なんぞおどろく
小たらんやといひよく先陣の擧とけ
まして相少とに敵となひひり取り
重能が死骸跡のかけりよにあら後者の
いよく重能の骸骨よにありいんが

とぶまや重次がいよく大ふくらせよとて
お見ざらむれとこやとまことしにほこ
小のぞんぞくと親族と守るこいふと

元和二年

大権現豊洲羽立年杉宣郷

台徳院殿の命とけり重次と魚川の城
まよと一石餘と加倍して二万石餘と
成せし

同日杉宣郷被列を別とわしめ

紀伊國小村せいのくにのこむらに在りし時新宣郷しんげん一百石の
加増かぞへと並次なむじ小三こさんつけりて都合くわいごう三百石條
此こゝよりこゝと田いり色いろとてとて此こゝとと上かみ横よこ領りやう賀が
の紐こゝ下したよりより之の石いし條じやうと並次なむじがトトに属ぞく
せし又また与よ力ちから三十六人さんじゅうろくにんとありたれつけ
ら家いへ回まわりしのぶとと並次なむじ

大権現おほいけん小三こさん見えなくもあけりて、戦いくさ伐ぎりある
ことにはいさし小三こさんさうりすことふりなり
こと勲いさな切きりありしこときびなりしこと並次なむじ

天性てんせい若わか小三こさんさうりす一生いっせいれありて、
そのまじりてことと是こゝ小三こさんゆきとて始はじめ末すえ
たことありさうりな一ひとく小三こさんさうりすとありて
いぬくろれゆなりとれとゆつこと是こゝ
のす

寛永十二年かんえいじゅうにねん五月十三日ごがつじゅうさんにちに病いび死じ
八十二歳はちじふにさい 法名ほふな崇賢すゑけん 藤ふじ嚴院げんいんの号ごうと
並次なむじ死し期きりのごんごんとていふことありけるは
秋あき骨ほねとてかありて冬ふゆ別わか業ごう子こ此こゝの現げん奇き

小おさめよき、是並次が先祖の墓所を
ふふ依くなら頼宣卿並次が切業と
いふみろしんで、まきらえとまらり遺
骸と明現寺小おさめくろれ冥福と
修す志通じても遊芸の養とけくす
是比國よほう少るが故り又和歌山の
城北北小おわく一字と建立し崇賢
ふこ号し並次が新像と安否す

重信

長十郎 五郎 對馬守 生國日あ

天正十二年長久手湯陣の時

大権現小おさめをりて敵と切く

甲首一級と得たりと後 治り

依く

公酒院殿ふつふたぐまひる

安長五年志田湯陣小信守

同九年從五位下に叙し對馬守

小見

日十年上列の口を井とて来地

みふるとしこまふ是平生の勲

上意ふりあふ小海くなら

日十六年奉新職の尻小列志く

天下此政勢とあつりきく時小歳

又十五

日十七年下総國小見川下野國孫

城みく一万石此涉加増るる合て可

みふると傾す

日十九年十月大坂涉陣

台徳院殿小志くひなりていへんと教

一後列清水小志る時ふ

大権現先言駕と教一たきひく

江別水原の涉若難るるく涉使と

台徳院殿一進せきく治けるをいそ

に作談せりるへきりあすみ

やふ涉と海まへ

白河院殿いりしと永原小沙敷向い
せ習の士卒おきふ重經治と野
あつこ旗本の該軍勢と引ぬく
沙跡ち進敷一京師小引こ家
ろまわ法身に列して大坂おき
じき

白河院殿の沙跡おき
軍中へしせじりここと事と言と
と大坂和略こまつと
白河院殿の沙跡おき
上使とぬく
京師小

おむせたまふも此を倍
領く大坂りのりこま事三四日
該勢と引ぬく京師小
元和元年五月大坂再乱の時
小治く隊中の軍士と引ぬく旗
本の好陣こなる事と引ぬく軍
兵と子を長小つけく重經

白河院殿の沙跡おき
と同日方を治小治く先陣

小石色じき戦場の神と見及で合
戦とべさの時刻と云と一則
台駕とすじを以て渉及小と云く
法軍と下知とを長も又と兵と引
わく法軍敵とぞに殿小一城つお
小落居一けさバ秀頼と母とも
ひと花の心小あげくる時一井
掃部政直者討もとらけたまひ
を以て捨使しうりを以て直者おもら

て秀頼とあざむきく大略一引
法軍小見せきいけぞんとて速
甲斐守とす頼きとせきいひけら
秀頼の陣系セバ母もに死と云
と云く一之甲斐守則大野修理
おとひくいとく秀頼陣系一た
まはし敵とまらふと云く一に秀
頼と母と同く城とあんなて
興二十と云ひともと云く一

丁馬一文とある。二つは興と直
存を以て又之事と云ふ。今
大権現に涉使を以て其やふ沙汰
と云ふ。其を以て云ふ。す
いふおのく土籠へ火と云ふ。ち
秀頼曰く母を以て修理甲斐守
等焼死と云ふ。後を以て釣家小治
備前治下張りて其母曰あ
まり流事と云ふ。て京師小治

曰年八月常陸國麻郷下野國
城を以て國山と云ふ。二万石の
城に増すと云ふ。傾くと云ふ。

曰六年福嶋た清門を以て正剛
國と改めし。其時を以て永井を
以て勝と云ふ。て子を以て
と云ふ。西國の法場と云ふ。其
廣嶋小敷向と云ふ。先海中の
之を以て使者と云ふ。其

城とすすぎのうとつぐ時
風守一けふハ城中留守の家信
正則が書状を耳せむんハ城とす
べしすとりくすまらる苑地の
うーありーとさ重信法助と
わくもとせんとせし正則書
とせく城とすすべしあひひ
ちの家信を小つぐ是く信く事
りく城とすうるさなまに其日

廣嶋ふちく國督と沙汰一八月
下白伏見小堀

日年十月上別言嶋小く沙加増と
たまらうく破合五百六十子石條と
日七年六月廿九日死を年六十五
法名良善

次基

九助

とす次基川井市助と不和の事

ありてきこいといふあ次基是とい
くくひより市助が家小せく市助と
くしあると市助が島小おやもいしを
小せくあ次基とくく少く死の時
小交長三年二月九日あり年三十

重長

勝菰 右京進 生國武菰

美の重信が
外孫

交長十四年けりやく

大権現

台徳院殿へ帰してる連よりい好

台徳院殿へつたてくまの家

日十九年十五歳して大坂御陣

北信守とつとむ

元和元年大坂再戦の時敵とく

首級とゆふ

四年従五位下に叙し伊勢守小

治と坂小右京進とありし

日六年上列坂鼻たかのね小のりくかべらち地二
子あまをたふ

日七年 鈞命けんめいに依たもとくあま督とつご

六百六十餘あま石いしといなり

日九年 治小ちひさ依たもとく

將軍かみ家いへ小ちひさ治ち久ひさたたくま治ち久ひさ是こゝ

寛永元年かんえいげん為な國くにのとく大だい名な皆みな 鈞命けんめい

といふく大だい坂さか北きた城しろ乃なり石いし垣かきといふ

くあ時ときとい勤ちん方ほうとい慈じ一いつてい衣い服ふくとい録ろくふ

を長秋ちゆうしゆ元げん但馬たにまのちゆう泰たい朝ちゆう三さん回かいくく上じやう使しと
一いつてい大だい坂さか小ちひさのしじしといふくのじ事こととい沙さ比ひ
といくく伊い戸こ子しゆゆ也なり

日二年 涉書院しやくしゆいん常じやう光くわう院いんといなり

日三年 大坂おほさかのいし垣かきといふくといふく時ときをい長ちゆう

二にといびび上じやう使しといふくてい吉きち山さん大だい花はながい楠くすの

幸きやう成せいとい同どうくく大だい坂さか小ちひさのいし垣かきといふくといふくといふく時ときをい長ちゆう

此こゝ方かたといふくといふく 鈞命けんめいのいし地ち

乃なりといふく伊い戸こ子しゆゆ也なり

同十年上別惣社ふおわく一百石
の湯切増とてまうく都合六百六石
ふと成と

同十二年寺社なりとなり又を國の
所領とて

同十四年養者番とつとむ

重元

四島右衛門 伊賀守 城別伏見小生
重信(道)とて中(子)と

寛永三年八月三日

將軍家よりそのまじり同日

名徳院殿と抄中とて

同四年湯書院番とつとむ

同六年湯切米六百石とて

同八年湯使番と成く布衣とて

同十年湯切米此らとなす

同十二年と総國婦崎とて千五百石

の成化とて

同十四年従五位下に叙し伊賀守
小守

同年沙小姓組に番頭となり

同十九年十二月百石の加増となり
ついで二子石と領と

重信

伊賀子代 式部少輔 生國武藏

祖父此譯よりらゆ 早世

女子

朽木氏少輔 植綱が妻

女子

丹羽左京亮 光重が妻

女子

秋田安房守 盛季が妻

男子

知雅

重貞

伊勢子代 主税

母吉伊頼の従友堂大守の次子也

重能

彦口郎 生國を以

重次もく重能と

名徳院殿了了たるまづし重能

直治

彦吉郎 従五位下 飛騨守

紀伊頼宣卿少子くやが老となれ

父重次率して後家督とほぐる此

たしびよ与力足將承父が時のこゆ

某年たる取資糧一子もたれ

元和元年五月七日持別大坂にて戦死

時小三十歳 法名法養寺想 西現院に

号と

寛永十三年九月二日紀列して病死
年三十 是名榮命 嶺藤院也
号す

直政

彦四郎

其ハ直次が婿椋原を波吉政長が婿男
なり重徳戦死して子なき故
公徳院殿の氣小徳之出子に任して

重徳が家督をつぐ幼年なり

將軍が御子たるは御重徳

公徳院殿ふつて資糧子をとす直政
其れ直と相續して出進と領と
又祖父直次より直政をたす此助成と
して三千石とありふ出進と令く御子
とす

家紋
藤丸

安藤

● 重正

四郎藤

生國三河

大権現小浜之村之妻の里々大沙番也

つとむ

長四年年六歳之孫也 法名

道長

手成

四郎丸

生國曰茶

大権現くわんげんつとをりて大沙番おさばんと云ふ

元和六年十二月廿二日四十六歳よんじゅうろくにんを死

法名宗詣しゆんぎ

正次

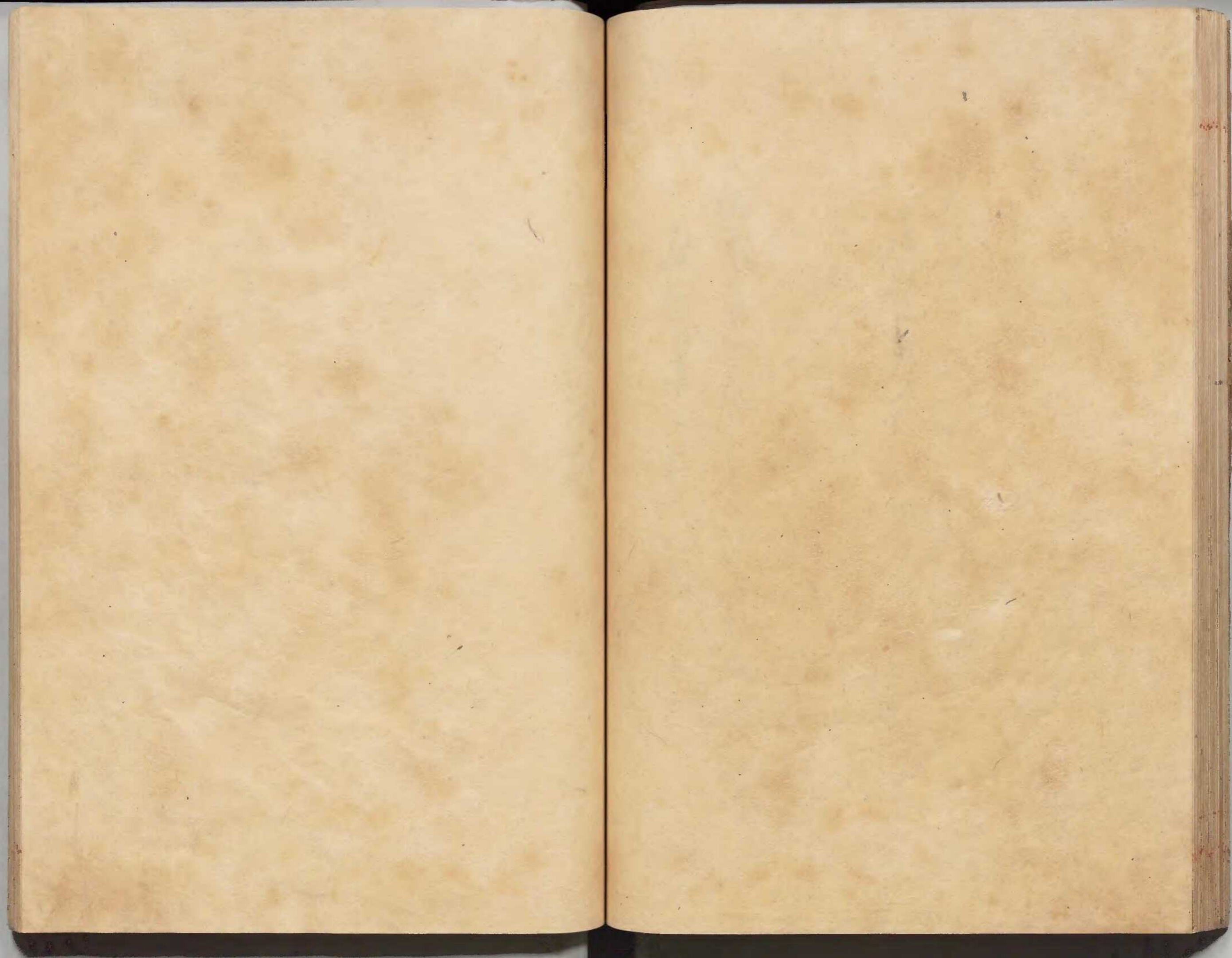
久右郎

生國相摸まも

寛永六年六月十日

將軍家しやうぐんと相あひなりて大沙番おさばん小入

家紋いへのかぎと板丸いたまわ



安藤 あんどう

● 定勝 じょうしょう

十津守尉

清康君 きよやす

生國三河

廣忠郷 ひろちゅう

定正 じょうせい

三島右衛門

生國同家

大権現

台漣院殿ふつふたしくまう

安長九年八月死に六十二歳

定武

忠右衛門

生國曰あ

慶長八年

台漣院殿と押してつゝる

元和元年

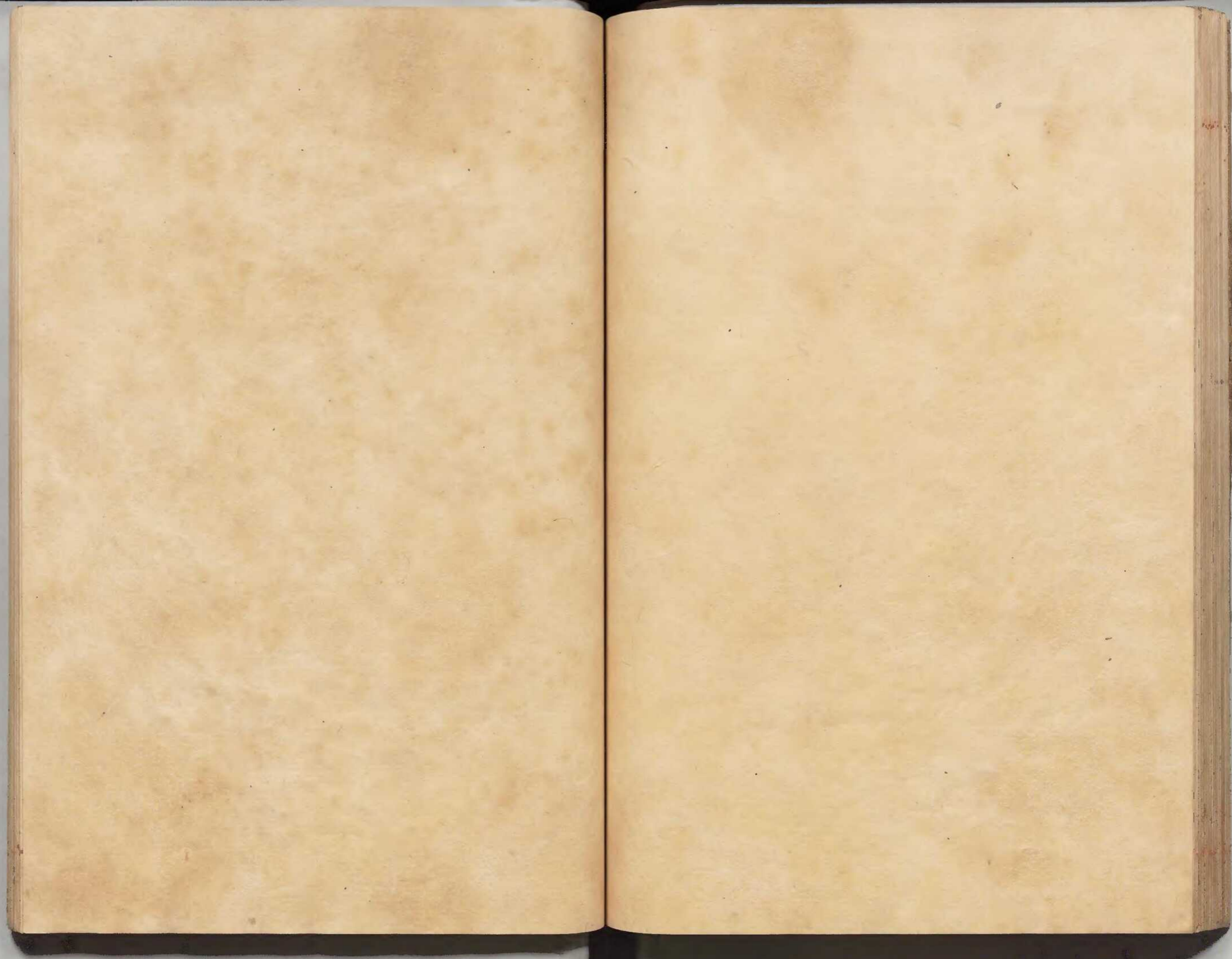
將軍家より人たしくまう

定朝

六次

生國武苑

家紋板丸



来

民部 んぶ

生国同前

来 き

御理 ごり

法名 ほふな

道 みち

個 こ

生国信別 なまくにのしるべ

村上 むらかみ

来

信濃

生國上総

法名一岳

久留里城へ移す

信喜

尾瀨門

生國旧家

天正十八年

東照大権現と相一なり關原なりび

大坂御陣とつとむ

元和二年

右近院殿と孫一守

寛永元年

將軍家へ侍久たてまつり

曰三年七十七歳少く病歿

信政

尾瀨門

生玉武列

元和二年

台漣院殿と拍一子

寛永元年

乃軍家と評一たてまの

家紋上此字

某

孫吉通

某

孫二席
生國ん行り別
織田の信長の小の治の小

村上

大権現オホケンゲン一ヒト之ノ年トシのノ後ノチ上ノ林ノ系ノ式ノ位ノ太ノ神ノ
康政ヤサキ一ヒト之ノ年トシのノ後ノチ上ノ林ノ系ノ式ノ位ノ太ノ神ノ

云勝クモカチ

云六郎クモカチ

大権現オホケンゲン一ヒト之ノ年トシのノ後ノチ上ノ林ノ系ノ式ノ位ノ太ノ神ノ
法名ホウナ常心ジョウシン

云久クモキ

云六郎クモカチ

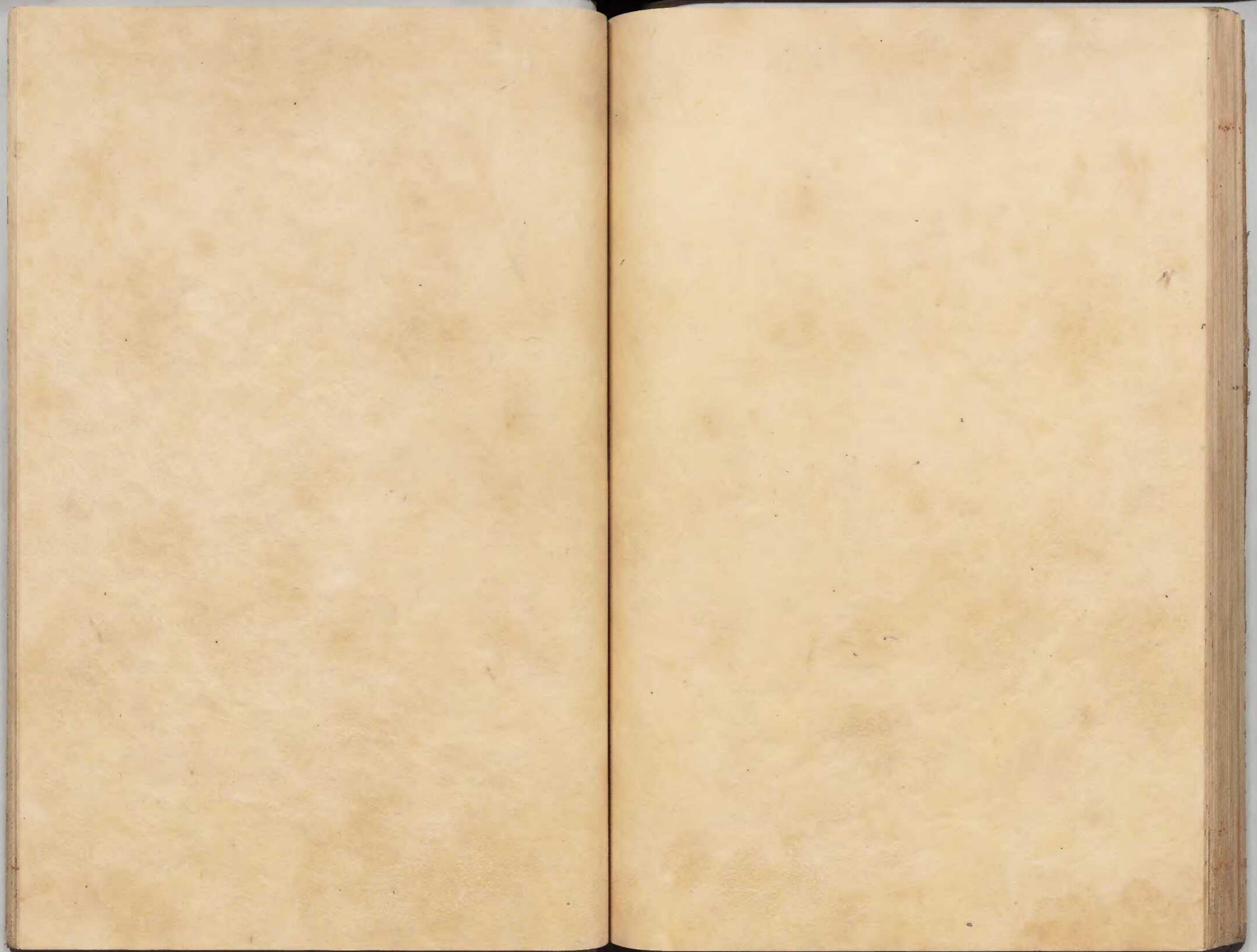
実吉ミツキチ竹心タケココロをシ子コならシ云勝クモカチがノ孫ノなりシ
云クモカチ出デ子コとシなりシをシ子コなりシ

大権現オホケンゲン乃ハ治シふル一ヒト之ノ年トシのノ後ノチ上ノ林ノ系ノ式ノ位ノ太ノ神ノ

属クモカチ

寛永元年カンエイノトシ御番ミツバとシ治シふル

家紋ケモノ丸マル心ココロ小鳩コトビ暖草ノグサ



村上

● 来

信濃守 まきのり

生國氏 いづくにき

来

信濃守

生國氏

信長 のぶなが

武田氏 たけだ 信長 のぶなが 氏 うぢ 列 りゅう と と も も に に 入 い ら ら ず ず 時 とき 信 しん 列 りゅう

と立のう後列ふお色じき今川氏真
ううふ

勝友

文隆村 生國後列

を列演松うおわく

東照大権現と持うたくまうふ

文長十一年十月十八日六十九歳少く

記す 法名法受

勝信

文三郎 文隆村 生國武列

文長十二年正月十九日

名徳院殿と持うたくまうふ

元和四年十二月

將軍家と持うたくまうふ

家の紋ん九く曜く根ね心こ源げん

来

次島屋の 生玉同前
右二代吉地けい下人げんとちりて丹たん列りょう下

来

信濃しんのの

生國丹波えんごんたんぱ

村上

居候す

云正

石見東 二太東門 生國曰あ

文禄二年云正二十八日辰の時筑前

中細言秀秋よりしるしを習れ者少し

なり

慶長五年七月鳥井彦太衛尉元忠

伏見の城よりたたくこりふ時より秀秋

こ道とせりからんで仕寄とつげ竹末と

きほくこりふ中よりあきさつり

火矢とらふけくまでには居けなんす

秀秋が家に松野の馬と云正とすみや

ふくせほさく焼くふふ示れ竹末は

火とらけりして竹末とほりり

仕寄おきてに壁とけ火矢放火の

難とふせぐ時より旗をふるや

中ふるまひりの使七夜ふふと

せも城^{しやう}中^{ちゆう}より鉄^{てつ}炮^{ぱう}きびしくけり
いふもくを^ま使^ひくふきたるふか
あたはずして次^{つぎ}に竹^{たけ}柴^{しば}まき
ふ使^ひ八^{はち}夜^やにおよぶ時^{とき}大^{おほ}嶋^{しま}源^{げん}次^じより
きをりて秀^{ひで}秋^{あき}れ余^{あま}とほくさ
け既^いたつ竹^{たけ}柴^{しば}と既^いたつ既^いたつ
く既^いたつす士^し卒^{そつ}と余^{あま}と急^{いそ}に
引^ひくべきれりといはくさ
あつてまきい道^{みち}すといふか紙^{かみ}

とげます又源^{げん}次^じゆふていまく竹^{たけ}柴^{しば}
より堀^{ほり}端^{はた}まきこれあひすなふや
河^か原^{はら}や吉^{きち}正^{せい}よりいまく十七
八^{はち}百^{ひやく}より源^{げん}次^じ又^{また}いまく志^しより
百^{ひやく}よりとつく志^しより源^{げん}次^じゆふていまく竹^{たけ}柴^{しば}
く女^め吉^{きち}秀^{ひで}秋^{あき}れつひなるよ
竹^{たけ}柴^{しば}我^{われ}軍^{ぐん}れりといふり
吉^{きち}正^{せい}竹^{たけ}柴^{しば}より堀^{ほり}まきといふり
らけしは十七^{しち}百^{ひやく}ありすから源^{げん}次^じ

こおやまに旗本一ゆきくこのしよ
いひあまは秀林れいよく白晝はほ
がまきこころれ竹米とやうらる
事ひとふま馬とを正ぐらうき
ふありやくく大さふ感悦ありす
に落城れ刻秀林軍踏二方あせ
り入ま馬を名護屋丸れ先がけたるを正
八松丸乃先陣よりこま時を正柯蔓
り隅取紙れ美地とりつく一書に

のりあげ多門れとふにめくこれと物
いよく法軍ともげます秀林通を
見てこま四と賞す

同年九月関原津陣れ時銃砲頭也
たり秀秋いるごと

東照大権現へ遊んで戦場よりおも
じく秀秋が先子れ軍兵大谷刑部
か捕を継が陣よりかつてくまこ
指縁すし時ふを正旗本とすすみ

ゆきく軍兵と下知しちとありて
て数百れ敵と遊人ともこれ軍切を
秀林もかき感して陣陣はち鎮
炮子挺れ物頭とち先手足糧五十
人とあづけられ敵をきりこれあり
を正中けりあむ役れち一ツハけ
たまし家應し辞退再三おふ
やしども秀林又もきいていしくあ役
れらつひと余人しあげく應し

さあひびとを正あけり家應しと此
命よりと危しむととせずて秀林
死期もくあ役としとむし秀林死
て後

大権現しり秀林が家老ふ命して
國中の政勢貢税れ事と乱の事
めたまふ時家老等も正とあ役きよ
せく相やもふれとちりて一冊
れ帳しりあふし正も回し

判^{えん}形^{がた}と六^{ろく}つん事を^をあふ^{あふ}去^こ正^{ただ}これ
と辞^いす^いやい^い一^{ひと}も^もあ^あわ^わく^く中^{ちゆう}に
とつ^{とつ}判^{えん}形^{がた}とく^くあ^あ右^{みぎ}れ^れ恨^{うらみ}と小^こ
坂^{さか}新^{あらた}助^{すけ}
大^{おほ}権^{けん}現^{げん}乃^の涉^{せつ}前^{まへ}一^{ひと}指^{さし}糸^{いと}一^{ひと}て^てと^と覽^{らん}よ
う^うま^ま時^{とき}小^こ言^{ごん}正^{ただ}家^け老^{らう}也^や同^{どう}判^{えん}形^{がた}
事^{こと}と^と涉^{せつ}不^ふ審^{しん}小^こお^おは^はり^りめ^めさ^さら^らる^る
一^{ひと}時^{とき}小^こ新^{あらた}女^{にょ}言^{ごん}と一^{ひと}け^け取^とる^る去^こ正^{ただ}小^こ方^{かた}
う^うり^りこ^こし^し一^{ひと}も^も秀^{しゆ}林^{りん}也^やと^とあ^あわ^わ去^こ正^{ただ}

廉^{れん}直^{ちゆう}なら^らあ^あや^やと^と知^ちよ^よら^らま^まく^く心^{こころ}
えん^{えん}山^{さん}川^{せん}寺^じれ^れ事^{こと}と^とあ^あづ^づら^らま^ま一^{ひと}じ^じ農^{のう}
夫^お高^{たか}人^{ひと}一^{ひと}く^く一^{ひと}く^く家^けま^まく^く去^こ正^{ただ}信^{しん}一^{ひと}服^{ふく}
せ^せす^すと^とあ^あふ^ふの^のな^な一^{ひと}ま^まま^まら^ら秀^{しゆ}林^{りん}
家^け老^{らう}等^{とう}去^こ正^{ただ}も^も判^{えん}形^{がた}と^と六^{ろく}つん^{つん}と
あ^あわ^わく^く中^{ちゆう}に^にあ^あわ^わか^かく^く辞^い退^{たい}と^と就^{しゆ}
事^{こと}あ^あら^らま^ま一^{ひと}て^てか^かく^くれ^れこ^こや^や一^{ひと}又^{また}
池^{いけ}田^{でん}三^{さん}屋^{やく}輝^き政^{せい}去^こ正^{ただ}に^に去^こ正^{ただ}と^とま^まり
く^くや^やら^らま^ま一^{ひと}新^{あらた}女^{にょ}言^{ごん}と^とあ^あわ^わく^くじ^じる^るれ

しりしとけいば

大権現こころめうまくりおうまき
しひくま正が本ん領りやうとしたづ祿り
あひびは百石のり言とけいば
二百石は津加増少く千石下り又
み日すくはか増み百石と下りま
於合千石百石は津朱京と項載す
安永長十九年大坂津陣の時上方は
津代安して京都あり

河相多正重盛次本おありて十月
十三日續炮れ者百人騎馬十三人衆
の塙一しけりもすころ本お大坂よ
アシ率をおし一人ものりす遊う
川又大坂より吹田のりに船橋
とけく次本一也り也りとり
風向するのり大坂より本お郷里は
人民本お母とけい本お一揆とお
大坂の味方いすよ本おわく三年

の年貞とゆふ一七年法没そのぞ
く通しとゆふと氏等けりやとて
一揆とて千通しとたむれあひび
まやく加勢とて越へき旨十月十
五日の早朝は直盛のころ板倉伊賀
守勝重許しにけりあふり母波
れ法侍におゆまゝに加勢におもむくべ
きよりとけり時を正松平隠波も
あふりひく伏見れ城ありとて

とも坂本へ後向す一に勝重下を
ゆくことあり隠波守へおゆりり
けりば隠波もいよく汝我もつこく伏
見れ城とゆふれうの敵たむひ守
治色もまゝとてういきたるこも
一足も城へおへりすを正通を
ゆく勝重もつげくすみやう
坂本へおもむく人こりあふり伊賀も
いよくを正とて城とていやく

大敵よあたらん事儀通れりしに
なりこそふを正答くいく坂地取
られとありままりたぐ堤の道一
すらあり小踏ふりとふともこれと
ゆせぐり利あらん若舟深と
すとも細とほくずはらまべとす
あしごとられ士卒と引やく日暮
まよふせがば敵うんぞたやま
むとととととんやり敵川と

あしとととととんやり敵川と
あしとととととんやり敵川と
あしとととととんやり敵川と
あしとととととんやり敵川と
あしとととととんやり敵川と
あしとととととんやり敵川と
あしとととととんやり敵川と
あしとととととんやり敵川と
あしとととととんやり敵川と
あしとととととんやり敵川と

大指現

台座院殿京伏見へ沙恙所れ時
攻地とすりり晴重書とを伝
とらりて

大権現

台徳院殿一言と一けねハ在正小方た
つとつども一様と引ぬく軍四と
らげますのうと被立と
翌年大坂再乱の時味方れ踏らる
へと乱つに在正力殺して衆と
げます

寛永年中

台命よりして忠告

小治ふ

同十二年極月廿二日死す七十二歳
法名道徹

三正

次郎左衛門

生國曰前

元和三年五月十三歳死す

台徳院殿と稱しなくまひる

旧七年より湯番と称す

寛永二年九月二日在正が在徳と稱

順スズ
す

家イ乃ノ級クワ丸マル此コノ口クハ上ウヘ文字モノ

